

【事例報告】

家庭文庫からひろがるボランティア活動

やかまし村文庫 主宰 上村あつ子氏

こんにちは。「やかまし村文庫」から来ました上村です。

今までの二つの団体のお話は、メジャーと言うか、いろいろな人たちを取り込んで活動なさっているお話でした。私どもの活動は、自宅で子どもたちやお母さん方を招いて、定期的に、「読み聞かせ」や「お話」を楽しんだり、「手作り遊び」をするという、マイナーなものです。お話と手作り遊びの会を始めて、来年で25年になります。

「やかまし村文庫」は、おはなし会と手作り遊びの活動を始めて1年くらいたったある日、「ここにある本借りられないの？」と子どもに聞かれて、急遽貸し出しの準備をして本格的にスタートしました。お手元の資料にあるように、会員は多い時には50人位いましたが、今は33人です。結構出席率がよく、夏休み前のお楽しみ会には、28名の参加がありました。

実はこの報告のお話をいただいて、“私に何が話せるのだろうか”と、思って来ました。これから、文庫の様子を写真で見させていただきます。長年続けていると、ここにいらっしゃる仲間の井上さん、松本さん、梶田さん、堂地さんもですが、親子で楽しんでいるうちに、自分でもやりたくなり、図書館や、小学校、幼稚園に行って活動をするようになりました。結局、自分達が読書ボランティアとしての活動にはまり込み、その輪が広がり、25年続いています。

文庫をしているといろいろと嬉しいことがあります。

先日は、毎年開催の「福岡市読書フォーラム」の会場で、文庫に来ていた子と再会しました。その子は高校生になり、高校の図書部に入ってボランティアをしているそうで、「上村さん、そのブースで読み聞かせをしますので、来てください」と声をかけてくれました。私は涙が出るほど嬉しい思いをしました。

学生さんや若い人を直接取り込んでいるわけではありませんが、長い目でみると、今、文庫に来ている幼稚園児や、庭を駆け回っている子どもたちが大きくなって、そういう活動をしてくれるのではないかと、と少しずつ実感しています。

では、「活動の原動力はなんだろう」と考えた時、先ほどからも“ボランティアは楽しみである”と何度も言われていましたが、これに尽きるのではないかと思います。

“親子で楽しい思いをした”ことで、子どもが成長したのち、“自分が小学校や幼稚園等に行ってボランティアをしよう”、“子どもたちと楽しんでいるうちに、子どもたちの言葉と心を豊かにするような活動ができれば良いな”という気持ちが広がっているような感じがします。先ほど、“文庫のメンバーから読書ボランティアになった”お話をしましたが、この会場にきてくれている仲間のひとは、高じて学校司書になっています。

福岡市総合図書館には、40周年を迎える「福岡おはなしの会」という大きな団体があります。その現在の副代表や、前副代表も文庫をささえてくれているメンバーです。

他にも幼稚園の読み聞かせ会の代表や、小学校の読書ボランティアの取りまとめ役など、文庫のお母さん方はさまざまな形で活躍しています。
自然な形で“ボランティアをやりたい、子どもたちと楽しみを共有していきたい”という思いが、活動を広め、突き動かしているのではと感じています。

日頃の活動の様子をお見せしたいと思います。

自宅の2階の和室で、お話をしているところです。

これは小学生の子が、まだ始まる前に読み聞かせをする人を指さして、何かいろいろ言って和（なご）んでいるところです。子どもたちは、学校での緊張を、ここでほぐしてからお話に入っていく、という感じです。

これは、幼稚園でのお話会の最初のところです。みんなで「いっぼんゆびのはくしゅ」という手遊びを楽しんでいるところです。絵本が始まりました。中には、のけ反っている子もいますけど（笑）、みんな一生懸命見ている様子が分かると思います。手前にいる子は、お母さんのお膝に乗っています。

こちらは、小学生の読み聞かせの絵本が始まったところです。最初にお見せした写真のあとの場面ですが、先ほどと違って集中してきています。もう身を乗り出して、話のなかに入ってきている様子が、お分かりになると思います。

これは部屋を少し暗くして、“ストーリーテリング”（素話）をしているところです。小学生は怖い話が好きです。この時は怖い話ではなかったのですが、みんなで「電気消して、消して！」とって勝手に消してしまいました。この写真では、窓のカーテンは開いています、それも閉めて真っ暗にしたがるので、ちょっと困っています。

だんだんお話の中に入っていく、最後は皆、すっかり物語の世界に入って聞き入っています。

ストーリーテリングが終わりますと、電気を点けて、また絵本を読んでいます。

とっても小さい本を持っているのが、お分かりになると思いますが、文庫ならではの光景です。小学校や幼稚園では、この絵本の絵は見えないため、読むことができません。子どもたちが大好きな、『きみなんかだいきらいさ』（富山房）という本です。これも聞き入っている様子がお分かりいただけると思います。

最後に、“おはなしのろうそく”を消します。

お誕生月の子が、ろうそくを消すことになっています。「このろうそくはおはなしのろうそくです。消す瞬間にお願いごとをすると叶うと言われていました」と話して、毎月やっています。「お金が欲しい」と現実的なことを口に出したりする子もいますが、とても神妙です（笑）。

「僕、〇〇月だけど消してもいい？」と聞くほど、人気があります。これは実際に消しているところです。

こちらは、毎回行っている手作り遊びで、10月のひとこまでです。どんでりてコマを作りました。色を付けたりしています。これも作業をしている様子です。これは全体の様子ですね、うちのリビングで、ソファのあった所に本棚を置いています。向こう側では工作、こちら側はコマ回し大会が始まりました。部屋の隅っこにあったキャンプ用のテーブルを引っ張り出して、やっています。一方奥の方では、女の子が「じゅげむの絵本」を読んで、絵本の世界へ入り込んでいます。これは子どもたちの表情を是非見ていただきたくて持ってきました。2年生が中心で、ほんとうに楽しそうに真剣な顔をしています。こうやって毎回子供たちは楽しんでます。

ところで、千葉の川瀬 紀子さんという方が、長年「きりなし文庫」を運営され、私たちのような日の当たらない地道な活動をしている人たちの報告書のような冊子を、いろいろ発行されています。

最初に出されたのが、1996年の「おはなしおはなし①」です。1998年の「おはなしおはなし②」が出され、しばらく出ていなかったのですが、今度は分厚い冊子が出ました。それが2015年の「おはなしおはなし通信実践記録集」というものです。

文庫の活動はもちろん、いろいろな読書ボランティアの活動がつまった一冊です。

実は、この中に私たちの文庫の宝物のような記事が、載っています。

「やかまし村文庫」のお母さんと子どもたちに、文庫のことを書いた文章を寄せてもらいました。当時6年生だった子の声載っていますので、それをご紹介します。

「私は小学校に入ってから文庫に通っています。本の読み聞かせやお話はもちろん、本の紹介もしてくれます。5年生の時だったと思いますが、どの本を借りようかと迷っていると、“大丈夫？一緒に探そうか？”とって、良い本をたくさん教えてくださいました。

文庫で出会った本は、大好きな本ばかりです。中でも『クローディアの秘密』（岩波少年文庫）が1番大好きな本です。主人公が、美術館に住むなどユニークな発想がオモシロイです。私は本が大好きなので、残りの約1年、いっぱい素敵な本と出会いたいです。」と書いてくれました。この子も、高学年になって読書リーダーになり、「福岡市読書フォーラム」でも読み聞かせをしたことがあります。

このように“バトンは静かな形で受け継がれている”ように、今、感じています。

本当に地道な活動で、わたしの身の丈に合った、マイナーですが、楽しい活動です。

是非、これからもずっと続けていきたいと思っています。

ありがとうございました。